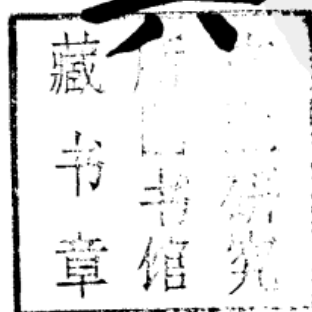


佛書解說大辭典

大東出版社藏版



ISBN4-500-00288-X

昭和50年6月6日 初版印刷
昭和50年6月16日 初版発行
昭和56年6月20日 重版発行

仏書解説大辞典 第十二巻 増補一
¥ 12,000

版權
所有

編纂者 丸 山 孝 雄
発行者 岩 野 真 雄
印刷者 鈴 木 和 夫

発行所 株式会社 大東出版社

東京都文京区白山1丁目37番10号
電話 (03) 816-7607

印刷所 凸版印刷株式会社

4384

ISBN4-500-00300-2 C3515 ¥12000E

増補刊行に際して

本書は、仏書解説大辞典初版本十二巻のうち、「解説の部」十一巻の増補である。この増補刊行に際し、その編纂の経過を一言記して置きたい。

初版本は、小野玄妙博士が編纂主任となり、昭和七年十月三十一日までに書写・刊行された仏教典籍を採録して、昭和五年末より編集事務を始め、昭和七年十二月第一巻刊行と共にこれを広告し、爾来三カ年、昭和十年十月「解説の部」十一巻の刊行を完了し、第十二巻「仏教經典總論」(小野玄妙編)を以てその完結をみた。

昭和三十九年五月、再版の刊行に当っては、「解説の部」十一巻を再版し、「解説の部」増補のため各巻の内容均斉の都合上、初版の第十二巻は割愛された。そして昭和七年十一月一日以降昭和四十年十二月三十一日までに本邦において書写・刊行された仏教典籍の解説を、新たに第十二巻増補一(アーン)、第十三巻増補二(ターワ)の二巻に分けて刊行することとなった。顧みれば、大東出版社の創立者である岩野眞雄前社主は、仏教の基礎的文献の出版に全生涯を賭けたのであった。即ち国訳一切經二百五十五巻と仏書解説大辞典全十三巻の編纂がそれである。しかるに、国訳一切經和漢撰述部の未刊十巻を残し、仏書解説大辞典増補の収録書籍目録及び解説原稿作成中に、昭和四十三年一月、彼は世を去った。晩年の数年間というものの、病のため引き籠り、自ら陣頭指揮のとれなかったことは、社の盛衰に影響なしとはいえない。前社主他界の後、果たして遺された難事業を継続し得るや、物心共に甚だ心許ないものがあった。

幸いにして、編纂顧問の^{前立正}坂本幸男(日深)博士並びに^{東京大学}中村元博士の御教導と激励をうけ、斯学の

長老である前弘教
大学長惠谷隆戒博士、日本学士院会員
名誉教授立正大学教授金倉圓照博士、駒沢大
学総長榎林皓堂博士、京都大学
名誉教授塚本善隆博士、日本学士院会員
東京大学名誉教授辻直四郎博士、元高野山大学長
密教文化研究所長中野義照博士、京都大学
名誉教授長尾雅人博士、東洋大学
名誉教授西義雄博士、日本学士院会員
九州大学名誉教授干潟龍祥博士、大正大学
早稲田大学名誉教授福井康順博士、前竜谷大学
竜谷大学名誉教授星野元豊博士、日本印度学仏教学会理事長
東京大学名誉教授宮本正尊博士、日本学士院会員
元大谷大
学長大谷大学名誉教授山口益博士、花園大
学長山田無文老師の諸先生に御賛助を仰ぎ、これに力を得て、関係十二大学の御協力のもとに、増補の編纂を推し進めることができた。

戦前刊行された「解説の部」全十一巻は、社の盛時に篤学小野玄妙博士編纂主任のもと、専任の編集員も常時十名近く携わっていたから、僅か五、六年でかの大出版が完成されたのである。それに引き替え、昭和三十九年、増補の編纂を委嘱された立正大学の丸山孝雄助教授は、大学の職務もあり、扶ける助手とて常勤ならぬ一、二名、多い時でも五、六名しかなく、常に人手不足に悩みつつも、若き護法者達の報酬を顧みぬ誠心の協力を支えられ、孜々としてよく精励された。特に近年、昭和四十四、五年を頂点とする全国的な大学紛争のため、解説原稿の大幅な遅延を焦慮され続けた。このように幾多の艱難を乗り越えて、昭和四十七年十月、まず第十二巻増補一の印行に入り、更に続いて第十三巻増補二の印刷が予定されるに至った。かくて、漸くここに前後十カ年を費した仏書解説大辞典の増補編纂事業は一応完成の日を迎えることとなり、編集者一同と共に重責を果たした感懐と喜びを深く味わうものである。

終りに、万端不如意の中において本書の刊行されえたことを仏天に謝し、未曾有の大学紛争の嵐の中を、この編纂事業の完遂に御尽力下さった各位の御尊名を録して、深く感謝の意を表する次第である。

昭和四十九年七月

社 主 岩 野 喜 久 代

増補編纂のことば

仏書解説大辞典初版本編纂の偉業を成し遂げられたのは、周知の如く小野玄妙博士であった。これは昭和初期に打ち立てられた偉大な金字塔であり、時代の荒波をこえて今日いよいよその輝きを増し、仏教研究者必須の道標として、その行く手を照している。

爾来四十余年、我が国の仏教学および関連諸学の研究は長足の進歩を遂げ、この間に書写・刊行された仏教関係の典籍は老大な量にのぼり、本辞典の増補が要請せられるに至った。今この増補を、昭和中期の一里塚として世に送るに当り、編纂の経緯を申し述べ、関係者各位に対し、深く感謝の意を表したい。

増補の編纂に当っては、巻頭の「増補刊行に際して」に記す如く、坂本幸男（日深）・中村 元両先生を顧問に仰ぎ、斯学の長老であられる諸先生の御賛助を忝うして、まず関係十二大学の「書目選定」の先生方に、書目の選定と書目カードの作成をお願いし、編集部選定の書目カードと合わせてこれを整理し、七千三百余書目を得た。次に「解説校訂」の先生方に、各大学における解説原稿の作成と、書名のヨミ、原稿の校訂等をお願いした。この間、「解説校訂補佐」の諸先生には、原稿のとりまとめや編集部との連絡など煩瑣な仕事をお願いした。解説原稿を御執筆下さった先生方は、第十二巻増補一だけでも、実に二百七十二名の多きにのぼる。また悉曇字母作製に際しては、大正大学の小野塚幾澄・吉田生而両先生に御協力いただいた。

思えば増補編纂に着手したのは、昭和三十九年五月であった。以来十年の歳月を閲し、その間、諸先生には

懇ろに数々の御教示と激励を賜わり、各大学・図書館にはこの事業のため特別の御高配と御協力をいただき、御執筆の諸先生には、あの全国的に吹き荒れた大学紛争のさ中にも、解説原稿の御執筆に力を惜しまれなかった。とりわけ書目選定、解説校訂ならびに校訂補佐の諸先生には、長年月の間一貫して、変らぬ御懇情と御尽力を賜わった。内外の苦難を克服し、かくて今、増補刊行の日を迎えることができたのは、ひとえに如上の諸先学の御教導とお力添えの賜物であり、ここに深く感謝の意を表する次第である。

顧問の一人である坂本幸男（日深）先生、書目選定の労をとられた香月乗光・執行海秀・長澤實導の三先生、ならびにこの増補編纂事業の発案者岩野眞雄前社主は、増補完成の日を待たずして遷化された。御生前に刊行できなかったことは痛恨の極みであり、身の力の及ばざるところ慚愧の念に堪えない。この書を捧げ、謹んで報恩感謝の誠を致したい。

坂本先生亡き後もこの事業を推進し遂行できたのは、顧問中村元先生の懇切な御指導と、賛助長老諸先生の温かい慈恩の資である。御懇情に対し、衷心より深甚の謝意を表するものである。

また、矢崎正見先生には編集の手解きを、畏友佐々木孝憲・芹川博通の両氏には有益な助言をいただいた。煩雑な編纂事務については全般にわたり、岩田良三・仲澤浩祐・伊藤立教の三氏の献身的な扶左を得た。七千三百余におよぶ増補書目の整理は村尾郁代女史の尽力による。更に、森藤子・池上由紀子両女史には校正を、東京大学および立正大学の学部・大学院の学生諸君には、書目カード・原稿等の整理と校正を依頼し、字体・仮名遣いに至るまで細心の配慮を得た。岩野喜久代社主・山本健純社長はじめ大東出版社の関係者には、遅々として進まぬ編纂に終始雅量を示し勸助せられた。これら有縁の方々の協力なしには、この編纂事業のまとめは成しえないところであり、ここに記して心から感謝する次第である。

なお校正は、特殊なものを除いて、すべて編集部が行なった。万遺漏なきを期したが、書目の不備・誤植等があれば、それらは挙げて私の責めを負うべきところである。江湖の御寛恕を請い、御教示と御斧正を願う次第である。

昭和四十九年七月十八日

編纂主任 丸 山 孝 雄

仏書解説大辞典第十二卷増補一 編纂関係者

〔五十音順・敬称略〕
〔字体は署名による〕

編纂顧問

坂本 幸

(日) 男
元

中村

書目選定

荒木 有信 (大正大学)

石川 良昱 (花園大学)

臼井 元成 (大谷大学)

横超 慧日 (大谷大学)

香月 乗光 (仏教大学)

執行 海秀 (立正大学)

平春 生 (竜谷大学)

橘恭 堂 (花園大学)

堤玄 立 (竜谷大学)

長澤 實導 (大正大学)

西義 雄 (東洋大学)

荷葉 堅正 (大谷大学)

羽田野 伯猷 (東北大学)

平川 彰 (東京大学)

牧田 諦亮 (京都大学)

水野 弘元 (駒沢大学)

宮坂 宥勝 (高野山大学)

解説校訂

石田 充之 (竜谷大学)

稲葉 秀賢 (大谷大学)

臼井 元成 (大谷大学)

勝又 俊教 (東洋大学)

信樂 峻磨 (竜谷大学)

羽田野 伯猷 (東北大学)

平川 彰 (東京大学)

藤原 幸章 (大谷大学)

牧田 諦亮 (京都大学)

松長 有慶 (高野山大学)

水谷 幸正 (仏教大学)

水野 弘元 (駒沢大学)

壬生 台舜 (大正大学)

宮坂 宥勝 (高野山大学)

宮崎 英修 (立正大学)

柳田 聖山 (花園大学)

解説校訂補佐

荒牧 典俊 (京都大学)

池田 魯参 (駒沢大学)

氏家 昭夫 (高野山大学)

江上 淨信 (大谷大学)

岡亮 二 (竜谷大学)

沖本 克己 (東京大学)

北山 覚 (竜谷大学)

京戸 慈光 (大正大学)

古賀 英彦 (花園大学)

坂部 明 (東京大学)

宗兼 利 (竜谷大学)

長島 尙道 (大正大学)

(旧姓) 西田 圓我 (仏教大学)

福田 亮成 (東洋大学)

藤村 隆淳 (高野山大学)

藤善 眞澄 (京都大学)

古坂 紘一 (東北大学)

眞柴 弘宗 (東洋大学)

松濤 誠達 (東京大学)

松原 光法 (東京大学)

松村 壽巖 (立正大学)

松本 照敬 (東京大学)

蜜波羅 圭之介 (東北大学)

嬰木 義彦 (竜谷大学)

〔所屬大学は書目選定・解説
原稿校訂当時のものである〕

石石石石石池生伊伊伊伊伊伊伊伊井五新 新荒荒雨穴淺淺淺明赤阿
田田川川川上田田藤藤藤藤藤藤川香上十井 井牧戸宮田井井井山井部
雅宏良存修善魯晃猷唯立瑞淨俊孝祐康大弘(旧名)慧典大文省真成円安秀慈
文寿昱静平應參純典真教叡嚴彦道学義策順二譽俊乘敏二順海道雄顯園

金金樗鍵香乙奥荻冲岡岡岡岡大大大太大大小小小小小江白氏岩稲稻石石
山子本主月部 須本村部 田 山南野田田 野 野 野 川 川 上 井 家 田 谷 葉 原 附
尚寛宏良乘正 純克圭和 久亮 公龍俊正利 桑塚 幾 智蓮達一淨元昭良祐秀芳勝
道哉之敬光信毅道己真雄子二淳昇覽人生齊澄範明道乘信成夫三宣賢信龍

小小小小桑栗栗倉日日久(旧姓)京清北北北北木木木木木冠河河川亀上蒲兜
林林橋坂原山原田下下 留 飛住戸 瀬山村村 川下村村村 内 村野口山村池木
光昭麟機淨秀行治俊義 圓 謙慈 前純宣光清 賢 孝重良正勝義正
紀英瑞融昭純信夫文章秀 是光薰覚高聰肇一彰孝孝央一照雄仁広彦秀亨

芹青鈴鈴勝杉菅下篠塩塩椎清調櫻桜酒酒坂坂佐佐佐佐佐越紅光後古小
川竜木木呂浦 沼 谷原入入名水 井 井 井 輪 詰 野 藤 藤 藤 々々石 煤地藤賀松
博宗治格信慧 泰壽亮良宏教 和部武 得眞宣秀俊隆密達 木木ま 令孝つ 英英尙英邦
通二美禪靜敬晃史雄達道雄司曆建郎元典敬一導賢雄玄信憲江頭学孝彦彰

旦丹玉龍橋武武竹竹竹竹竹竹高高高高高高高平田田 菊田田田田宗祖
保治山口 田内村村中田内見 橋橋 橋橋島木 木 村中 (旧地名)地中中上賀 父
哲智成明 恭 龍正牧仁了宣友寛 審弘俊鍊 紳 晃良 田中 明千教太龍 兼 江
夫義元生堂精和男秀哲弘成恭功壯也次明精豐元史洋昭 二澄秋照秀彦利子

松增牧前真真本本本本本堀堀堀星古古藤藤藤伏福福深富布廣広平平東日
井井田田鍋柴間多多多田内池田川原善村見永田貝土施川井井元和
憲淨諦孝俊弘厚弘得俊寛春隆雅和確幸眞隆範勝孝慈正亮宥俊慶慈
一見亮雄照宗一惠之爾道仁峰史江弘悟章澄淳子美雄孝壽夫杲敏慶榮喜圓

八森森森森毛村村村宮宮宮宮宮養峯蜜 三 三三三丸松松 松松松松松

木 利上上石本元崎崎坂島岸 友 友 沢 枝 山本本 村原長田岡

祐正祖章 充祐恵献啓忍英宥和孝 友 友 沢 樹 孝照皓 (旧名)壽祐有文宗

吳 惠昭行道司悠生先照翼一勝修勝潤哉介 (旧名)健淳 隆 敬一 (旧名)巖善慶雄淳

仲	芹	佐	岩	伊	丸	編纂主	割	渡	渡	嬰	和	和	頼	吉	吉	吉	吉	吉	横	横	結	山	山	山	山	柳	安	安	八	
澤	川	々	田	藤	者	山	任	田	辺	辺	木	多	田	富	村	野	田	田	江	山	井	城	本	端	口	折	田	富	井	木
浩	博	孝	良	立	孝			剛	宝	重	義	昭	謙	本	雅	耕	宏		忠	紘	覺	亮	智	昭	耕	哲	聖	信	広	信
祐	通	憲	三	教	雄			雄	陽	朗	彦	夫	壽	宏	人	史	哲	收	了	一	道	子	教	道	栄	雄	山	哉	濟	佳

[illegible]

増補編纂要解

一、本書は、仏書解説大辞典の初版本「解説の部」十一卷（昭和七年十月三十一日までに書写・刊行された仏教典籍を収録）の増補である。

二、この増補は、第十二卷増補一（アーツ）および第十三卷増補二（タール）の二卷よりなり、次の範囲の仏教典籍ならびに仏教に関係の深い書籍総計七千三百余書目を両卷に採録して解説した。

なお、初版の第十二卷「仏教經典総論」（小野玄妙編）は、「解説の部」増補のため内容均斉の都合上、昭和三十九年「解説の部」十一卷再刊の際割愛された。

1 昭和七年十一月一日以降昭和四十年十二月三十一日までに本邦において書写・影印・出版された邦語および漢文による単行本ならびに叢書・全集所収の仏教典籍。

2 インド哲学・インド文学の分野で、仏教に関係深い書籍。

3 宗教学の分野で仏教に関係深い書籍。

4 その他、仏教に関係深い書籍。

三、増補所収の書目は、大谷大学、京都大学、高野山大学、駒沢大学、大正大学、東京大学、東北大学、東洋大学、花園大学、仏教大学、立正大学、竜谷大学の十二大学附属図書館の蔵書を主とし、更に国会図書館の蔵書カードや、金沢大学附属図書館編「暁烏文庫仏教関係図書目録」（昭和三十八年三月）、駒沢大学図書館編「新纂禅籍目録」（昭和三十七年六月）その他の書籍目録ならびに個人の蔵書を参照して、関係各大学および編

集部がこれを蒐集・選定した。

四、項目は、書名を以て項目名とし、これを本項目と参照項目とに分けた。

1 冠称(角書、割書など)および副題を含む書名の具名を以て本項目とした。

2 冠称を除く書名のヨミの配列箇所参照項目を掲げ、――印を付して本項目を参照させた。

【例1】 昭和會本 勝鬘經義疏 ―― 佛解 ⑫ 昭和會本勝鬘經義疏 (仏書解説大辞典第十二卷増補一の「昭」の項参照の意)

【例2】 南山進流 聲明の研究 ―― 佛解 ⑬ 南山進流聲明の研究 (仏書解説大辞典第十三卷増補二の「南」の項参照の意)

3 書名は原則として内題(扉または本文の初めの題名)に拠った。

4 書名の字体・仮名遣い・送り仮名は原典通りとした。但し、原典の字体混淆の場合、昭和二十一年十一月以前の書名は旧字体、それ以後のものは新字体に統一をはかった。

5 項目の配列は、首字のヨミの五十音順による。同じヨミの漢字は、漢和辞典の通則に従い、部首順および画数順に配列した。仮名は、平仮名・片仮名を同一グループとし、同じ音の漢字を首字とする項目の後に掲げた。

五、増補の解説は、概ね初版の「解説の部」十一巻の形態を踏襲し、①書名のヨミ ②巻数 ③存欠 ④著者名等 ⑤発行年 ⑥内容解説 ⑦注釈書・参考書類 ⑧写刊年代 ⑨現所蔵者 ⑩発行所名の十項に分けて行なったが、時代の推移により各項の内容を改めた点もある。その要領を項別に示せば次の通りである。

① 書名のヨミは、日本音をへボン式ローマ字で標記した。同一書名に清音・濁音等異なったヨミのある場合は()内に別ヨミを記した。

② 巻・冊数のほか、書籍のサイズ、図版・本文・索引等の頁数を記した。

③ 存欠の項には、叢書・全集等に含まれるものについて、その名称と巻次を記した。なお「欠」とは、⑨のゴシック記載大学・図書館に、解説執筆時において当該書の所在不明なることを示す。

④ 著・訳・編・校注者名の字体は原典通りとし、()内に生歿年を西暦で記した。

⑤ 発行年は「十」および「年」を省き、()内に西暦を記した。

⑥ 内容解説の要点は次の通りである。

1 当該書の主題、主要な篇・章・節等の主題と内容を紹介し、その書の大綱を記す。

2 当該書の特色、即ち、その書がどのような資料、方法論により、如何なる観点から主題を論じているか、その特色を記す。

3 訳注書の場合は、所依の原典と翻訳および注釈の特色を記す。

4 文芸作品については、素材の取り扱い方の特色と、その文芸的意義を記す。

5 学術的労作については特に、その書の学問的意義を記す。

6 学術雑誌等所載の、当該書に関する「書評」は⑦に紹介した。

7 この項では、原則として新字体・現代仮名遣い・新送り仮名を用いた。但し、固有名詞、引用文など必要な場合、旧字体・旧仮名遣いを用いた。

8 この項の漢数字は、二桁の場合、原則として「十」を用いた。なお「十」を省くときは、特定の項目の解説内で統一をはかった。

⑦ 注釈書・参考書類の項には、参考文献のほか、当該書の「書評」のある場合、その掲載雑誌等の巻次をも記した。また仏書解説大辞典所収の書籍は

【例解】⑪三〇一d (仏書解説大辞典第十一卷三〇一頁第四段参照の意)

の如く記して参照に便ならしめた。

⑧ 写刊年代の項には、写本・刊本および写真複製のうち印刷によらぬものの年代を記した。なお所依の原本の年代には⑨を冠した。

⑨ 現所蔵者の項には、所蔵の大学・図書館名および個人名を記した。大学名は、初版本「解説の部」に準じて略符を用い、次の如く略符の五十音順に記した。

京大（京都大学）・高大（高野山大学）・駒大（駒沢大学）・大正大（大正大学）・谷大（大谷大学）・東大（東京大学）・東北大（東北大学）・東洋大（東洋大学）・花園大（花園大学）・仏大（仏教大学）・立正大（立正大学）・竜大（竜谷大学）

解説執筆者（⑥または⑩の末尾に記載）の所属大学・図書館名はゴシックで示した。なお、同一人が複数の大学・図書館所属の執筆者となる場合もあるが、これは当該書の帰属による。

⑩ 発行所名の字体は原典通りとし、住所は地方自治体名にとどめ、都道府県庁所在地は都道府県を省いた。

解説執筆者名は、原則として以上の十項の最後に（ ）を付して記した。但し行数の関係から⑥の末尾に移した場合もある。執筆者名の字体は署名通りとした。執筆後の改姓・改名は巻頭の執筆者芳名録に掲げ、旧姓・旧名を（ ）内に記した。

ア

阿育大王 ① A-ku-dai-o. ② 1冊

③ 欠 ④ 佐藤俊三著 ⑤ 昭和一七(1942) ⑥ 京大・駒大・立正大 ⑦ 大阪屋誠書店

阿育法王の聖業 ① A-ku-to-o-no-shō-gyō. ② 1巻、A5判、本文九一頁

③ 存 ④ 中野義昭(1891—)著 ⑤ 昭和九(1934)

⑥ 阿育王の聖蹟を回顧し、その聖業を讀えた書。資料は石柱及び磨崖法勅が中心となつてゐる。内容は、王の事跡について編年史的に考察し、彼の政治観・法の觀念を述べてゐる。次いで僧伽分裂の防圧、七種經典の推奨、仏教の保護について論じてゐる。最後に王が建立した磨崖・石柱等にふれてゐる。(藤村隆淳)

⑦ 京大・高大 ⑧ 天津・中日密教研究会

阿含經講話 ① A-gon-kyō-kō-va. ② 1巻、二八三頁

③ 存、現代聖典講話第一 ④ 増谷文雄(1902—)著 ⑤ 昭和三〇(1955)

⑥ 本書は現代聖典講話の第一で、阿含經の概説を通して人間觀と其の教を指示し、釈尊の説法の基本的性格を追究してゐる第一、第二、第三講。また、第四講より第八講では、「四諦」を中心に叙述をすすめ、第九講より第十六講で、阿含經中の數の經典を集録し、第十七講と最後の第十八講では、『大般涅槃經』にみられる釈尊の最後の旅と「大いなる死」について講述され

てゐる。全般を通じて本書には、著者の仏傳の構想がみられるとともに、キリスト教をはじめとする世界の諸思想と人間の宗教としての仏教との比較研究がなされてゐることなどからして、著者は、『仏教とキリスト教の比較研究』等を基盤に、後の『アーガマ資料による仏傳の研究』や『仏教概論』の基礎に本書を作成してゐると思われる。巻末に『南伝大藏經』と『漢訳大藏經』の対照表が付け加へられてゐる。(芥川博通)

⑦ 大正大・花園大 ⑧ 東京・河出書房

阿字觀攝要 ① A-ji-kan-sō-yō. ② 1巻 ③ 存

④ 中井龍瑞編 ⑤ 昭和七(1932) ⑥ 高大

阿字功能鈔 ① A-ji-kan-no-shō. ② 1冊、B5判、本文二七頁

③ 存 ④ 苗村徳次編

⑥ 真言宗の事教二相において、その本源ともいえる阿字の意味と觀法の実際について、先人の著作中より數編を選んで編纂した書。『母尾記』並びに覺鑒上人作の『阿字觀』、『三寶院勝覺』の手に成る『阿字觀次第』以上三編を主とし、巻末に『弘法大師勸發修行記』及び『大師起請文』を併載して、真言行者の自戒を期してゐる。(長岡秀幸)

⑦ (参考) ⑧ 佛解①六d ⑨ 昭和一五(1940) 刊 ⑩ 高大 ⑪ 神戸市

西藏文 阿毘達磨俱舍論 ① A-bi-datsu-ma-ku-sha-ron-zu-ki. ② 一部四紙 ③ 欠

④ 大鹽毒山著 ⑤ 昭和一〇(1935) ⑥ 高大

阿毘達磨俱舍論圖記 ① A-bi-datsu-ma-ku-sha-ron-zu-ki. ② 一部四紙 ③ 欠

④ 大鹽毒山著 ⑤ 昭和一〇(1935) ⑥ 高大

・立正大 阿毘達磨思想研究——佛教實在論の歴史的批判的研究 ① A-bi-datsu-ma-shi-sō-ken-kyū, buk-kyō-jitsu-zai-ron-no-reki-shi-teki-hi-han-teki-ken-kyū. ② 1冊、A5判、本文六〇三頁・原典資料略符

号一頁・索引二八頁・英文要旨四六頁 ③ 存 ④ 佐々木現順(1915—)著 ⑤ 昭和三三(1958)初版、昭和三四(1959)再版

⑥ 本書は實在論を中心とする阿毘達磨思想を、歴史的批判的に分析した研究書である。仏教の研究に必要な諸言語を広く修め、その上、東洋哲学も深く學んだ著者による、哲学的考察と言語学的分析とは本研究の方法論上の二大特色であつて、この方法が本書を、単なる「教理解説の書」以上の価値高いものとしてゐる。その内容は三篇より成り、第一篇は南伝阿毘達磨哲学を扱つてゐる。即ちそこでは哲學的基礎概念の分析、自性的世界とその構造、時間論を中心とした緣起思想の解釈、認識論の立場と四諦論の展開、心理過程としての認識論などの諸問題が考究されてゐる。次いで第二篇は衆賢哲學の世親と大乘仏教との関連における分析を中心に、北伝阿毘達磨哲学が論究されてゐる。即ちそこでは哲學的基礎概念の分析、認識と実践(慧の實踐的構造)、認識主体の問題、衆賢認識論の展開などの諸問題が取り上げられてゐる。最後の第三篇は阿毘達磨哲学と大乘仏教の展開——大乘に於ける古典梵語の成立とその思想の変遷——と題され、それはパーリ語とヴェーディック・梵語との関係、事実と根拠(pariyaya-nipatīyaya)のヴェーダ思想の仏教的把握(atanānaの意義の変遷)、我の概念の佛教思想化(asmimāna)の否定論理の歴史的展開(nekkhamma-vuṇṇakāmya)の原意に附加された思想發展の意味(Chantī-vuṇṇakāmya)のプラークリットの正當な古典梵語化(dīpa-dvīpa)という各章より成つてゐる。なお本書にはE・コンツとI・B・ホーナー両氏の序があり、錦上に華を添へてゐる。

⑦ 京大・東大・花園大・立正大 ⑧ 東京・弘文堂

阿彌陀院雜記 ① A-mi-to-ten-ki. ② 1冊 ③ 欠

④ 荒井寛方著 ⑤ 昭和一八(1943) ⑥ 京大・立正大 ⑦ 奈良市・鶴故郷舎

阿彌陀經 ① A-mi-ta-kyō. ② 1冊、A5判、五七頁

③ 存、聖典講讀全集第四卷の内 ④ 高橋順次郎(1866-1945)著 ⑤ 昭和一〇(1935)

⑥ 聖典講讀全集の中にある故もあつて、本書は經文に忠実に解釈が進められてゐる。内容は、著者の広い経験と學識によつて、經文の言葉の意味が解明され、佛教的知識によつて説法の背景が説き出され、更には、阿彌陀經に対する深い敬意(翻訳の良き、原文の美しき等)と極楽莊嚴の縮図として信仰から来る敬虔さが妙意を具説してゐる。(本多弘之)

⑦ 谷大 ⑧ 東京・小山書店

佛說 阿彌陀經 ① A-mi-to-kyō. ② 佛說阿彌陀經

阿彌陀經訓讀圖會

① A-mi-to-fo-kyō-kun-doku-zue ② 一冊、B 6 判、本文二九頁 ③ 存 ④ 村上妙清編 ⑤ 昭和一七(1942)

⑥ 阿彌陀經を理解しやすくするために、平易な和文に書き下し、なお、その部分的内容が一目でわかるように絵にかかれていた。すなわち祇園嘉会を初めとして、現在説法、七重行樹、七宝樓閣、天樂雨華、化鳥演法、風動作樂、光明無量、善人俱會、聖衆現前、諸仏證誠、諸仏護念、付属流通の十三図が巧みに描き出されている。

⑦ 仏大 ⑧ 京都・善念庵 (三枝樹隆善)

阿彌陀經講義

① A-mi-to-fo-kyō-kyōgi ② 一冊、四六判、本文一〇六頁 ③ 存

④ 廣陵了榮(1819-1900)述 ⑤ 昭和七(1932) ⑥ 本書は了榮師の口述を、当時真宗大学学生の里雄宏曜氏の筆記したもので、内容は小經の浄土三部經中における位置を、三經一致の面より、又三經各別の面より明らかにし、就中、真宗における此經の位置を三願三經三機三往生の配当により詳論する。続いて、本經の大綱を四項(来意・題号・大意・問答)によって顕彰する。(本多弘之)

阿彌陀經講義

① A-mi-to-fo-kyō-kyōgi ② 一冊、洋四六判、四四二頁 ③ 存

④ 山田將爲著 ⑤ 昭和一五(1940)

⑥ 本書は、大きく内外の二篇に分かれる。

外篇は、宗教の意義を説き明かし、宗教と學術・道徳との関係を論じて、宗教は人生の根本問題たるを強調し、更に仏教の根幹

たる釈尊成道の意義より阿彌陀經の開頭に至る流れを、淳々と説き、浄土三經の大意を表わしてその中において、遂に阿彌陀經の特色を明らかにせんとする。内篇は、本文にそつて逐次解説する。具体的経験や、適当な例を引き、三經、七祖の釈文、教行信証、和讃等を駆使して、平易なしかも信仰の流露する名調子で筆が進められている。更に原典たる鳩摩羅什の翻訳に、梵本、南條博士の和訳、マクス・ミュラーの英訳等を参照しつつ、しかも親鸞の眼(銘文、唯信鈔文意等)を通して阿彌陀經の意義を敬虔な態度で問法しつつ讃仰している。

⑦ 谷大・仏大・竜大 ⑧ 京都・同朋舎 (本多弘之)

阿彌陀經講義

① A-mi-to-fo-kyō-kyōgi ② 一冊、B 6 判、本文一五五頁・附録四八頁 ③ 存 ④ 大原性實(1897-)著 ⑤ 昭和四〇(1965)

⑥ 阿彌陀經の註釈書で四篇から成り、第一篇序説は訳伝、経題について、第二篇は序分講義、第三篇は正宗分講義、第四篇は流通分講義である。内容は『阿彌陀經』の本文をあげ、その和訳、意訳、講義という順に解説されている。なお附録として阿彌陀經における論題の解説がなされ、無間自説、一代結経、慇懃付属、光寿名義、十劫久遠、嫌貶開示、唯知隱顯、執持名号、証誠眞仮について、詳しく解説してある。

阿彌陀經講義

① A-mi-to-fo-kyō-kyōgi ② 一冊、洋 A 5 判、一五二頁 ③ 存

④ 竜大 ⑤ 京都・永田文昌堂 (小林昭英)

阿彌陀經講義

① A-mi-to-fo-kyō-kyōgi ② 一冊、洋 A 5 判、一五二頁 ③ 存

阿彌陀經講義

① A-mi-to-fo-kyō-kyōgi ② 一冊、洋 A 5 判、一五二頁 ③ 存

④ 金子大榮(1881-)著 ⑤ 昭和一一(1937) ⑥ 本書は、經文を講義されたものの記録で、分かり易く語りかけているものではあるが、特異な着眼点と、深い問法経験より滲み出る言葉によって、「平明なる経説」としての、また「尋常の説法」としての本經を、解説する。經文に即しつつ、誠に自由無碍に今現在説法の真相に迫り、「日本仏教史観」を具説するものである。(本多弘之)

⑦ (参考) ⑧ 佛解 ⑨ 四五 b ⑩ 谷大・竜大 ⑪ 東京・金子大榮師著作刊行會

阿彌陀經講義

① A-mi-to-fo-kyō-kyōgi ② 一冊、洋 A 5 判、一六一頁 ③ 存

④ 金子大榮(1881-)著 ⑤ 昭和二三(1948) ⑥ 本書は、昭和十二年に出版された『阿彌陀經講義』の改版で、新たに、阿彌陀經の本文を述べ書きにして、挿入しているのは、前書と同じものである。

⑦ 谷大・花園大 ⑧ 京都・全人社

阿彌陀經講義

① A-mi-to-fo-kyō-kyōgi ② 合冊、B 6 判 ③ 存、金子大榮選集第二十卷 ④ 金子大榮(1881-)著 ⑤ 昭和三三(1958)

⑥ 本書は、同名で単行本として改版も出されているものを、選集に集録したものである。經文の随文解釈の体裁で進められる講話で、經文が述べ下しにされ、各講話の始めに挿入されている。なお仮名遣い等は現代仮名遣い、教育漢字に直され、面目を一新して、新たに話されたものの如く、読むものに強く呼びかけてくるものがある。

⑦ 谷大 ⑧ 東京在家仏教協會 (本多弘之)

阿彌陀經講義

① A-mi-to-fo-kyō-kyōgi ② 合冊、四六判、一四二頁中經文七一頁・本文七〇頁 ③ 存、大谷光瑞全集第一卷の内 ④ 大谷光瑞(1885-1968)著 ⑤ 昭和九(1934)

⑥ 本講話の本文は、大正十一年に上海日本人会において講演せられたものであつて、その講話の前に、梵文、英訳(Max Muller)鳩摩羅什訳本文と和訳(補訳)を置いて、勉強に便ならしめ、經文解釈の態度の一端をもそこに窺わしめるものがある。釈文は、この梵英和訳によって言葉を吟味しつつ、平易な講話調で本文に添って展開され、宗學的というよりは、原典研究的要素を重視して、特に梵語の原典へ帰る作業を重んじている点、特色ありというべきである。しかも、莊嚴の問題、無量壽・無量光等の意義等を考えるに当たっては、大觀兩觀と比較して、經典の本意を探らんとする主眼をも堅持している。しかし引用事例に、当時の歴史的背景を反映して問題もあろう。

⑦ 谷大 ⑧ 東京・大乗社 (本多弘之)

阿彌陀經講義

① A-mi-to-fo-kyō-kyōgi ② 一冊、A 6 判、三八三頁 ③ 存 ④ 晚鳥敏(1877-1954)著 ⑤ 昭和一〇(1935)

⑥ 本書は、昭和八年鹿兒島にて為された講演の速記を整理したもので、經文に添って十講にわたって述べられている。内容は所謂經文の解釈というのみではなく、經文によって与えられた自己の宗教的感情を、自由闊達に敷衍し、信仰生活と問法とのあるべき姿を表現せんとしている。經文によつ

て具体的生活の中における信心を解明したものである。(本多弘之)

⑨谷大 ⑩石川県松任町・香草舎

阿彌陀經講註 ①A-mi-da-kyō-to-shū-ichū (ura-gaki). ②合冊、新書判、本文三八頁、索引七二頁、図版一頁 ③存、親鸞聖人全集註釋篇2 ④親鸞(1173-1262)集註 ⑤昭和三四(1959)初版

⑥京都 ⑦法華館

佛說 阿彌陀經講註 → 佛說阿彌陀經講註

阿彌陀經釋 ①A-mi-da-kyō-shaku. ②一卷合冊、四六判、一五頁 ③存 ④法然(1133-1212)著、井上哲次郎(1855-1944)・上田萬年(1867-1937)和訳監修、長井眞琴(1881-1970)校訂 ⑤昭和一二(1937)

⑥本書は、法然の講義の筆録を漢文に直した漢語灯録所収の阿彌陀經釋を、浄土宗全書本によって和訳したものである。和訳といっても、ほぼ原文を述べ下した形のもので、漢字はあまらず仮名をつけ、読者に便ならんが為に、上段に註をかなり細かく入れ、初心者が原文に近いものを理解するよう配慮されている。(本多弘之)

⑦〔参考〕⑧佛⑨四六b ⑩谷大 ⑪東京・大日本文庫刊行會

阿彌陀經集註 ①A-mi-da-kyō-shū-ichū. ②欠 ③禿氏祐祥(1879-)編 ④昭和一九(1944) ⑤谷大

阿彌陀經集註 ①A-mi-da-kyō-shū-ichū. ③欠、親鸞聖人全集第七卷 ④親鸞聖人全集刊行會編 ⑤昭和三四(1959) ⑥京大 ⑦東京・親鸞聖人全集刊行會

親鸞聖人御自筆 阿彌陀經集註 →

佛說 阿彌陀經集註(真書) ①A-mi-da-kyō-shū-ichū (ura-gaki). ②合冊、新書判、本文三八頁、索引七二頁、図版一頁 ③存、親鸞聖人全集註釋篇2 ④親鸞(1173-1262)集註 ⑤昭和三四(1959)初版

⑥本集註は、親鸞の阿彌陀經のノートである表書きの紙裏に書かれたもので、表に写すべき筈のものであろうが、表が経文とこの註で満ちたので、裏書きにしたものである。内容は、殆ど法華讀よりの引文で、その他に称讃浄土經の三文、觀念法門の三文、元照の阿彌陀經疏よりの九文からなっている。本書の書写は、内容から考察して吉水会下においてなされたものである。しかも自修用の阿彌陀經の書き入れ本であるから、本書には後年の撰述に見られるような親鸞の教相や安心の精密な説明を見ることができないが、若干の引用文や、それに加えられている返り点や送り仮名、即ち点声法等によって、そうした安心、教相の説明が生まれて来る課程を見ることができよう。

⑦〔参考〕親鸞聖人全集はさみ込みタヨリ存覚手写本「觀阿彌陀經集註」について(川瀬和敬) ⑧谷大 ⑨東京・親鸞聖人全集刊行會 (本多弘之)

阿彌陀經敘註 ①A-mi-da-kyō-jō-shū. ②一冊、A5判、図版一枚、本文二二〇頁 ③存 ④高峯了州(1398-)著 ⑤昭和三四(1959)

⑥本願寺夏安居での講義覚書をまとめたもの

のであるが、それにとどまらず著者年来の該博な仏教全般にわたる資料をもとにする阿彌陀經を中心にした浄土系思想概論ともいえる著作になっている。本書は阿彌陀經の講義を眼目にしたものであるが、その序論ともいべき仏教全般の中の浄土思想(弥陀思想・弥陀の本生譚・念仏・信、浄土三部經の中の阿彌陀經の教理的位、三經の隠顯・宗体、それに阿彌陀經の梵本・漢訳・註釈書にふれる前半も大きな部分を占めている。本文解説にあたっては梵本・漢訳諸本・諸註釈書およびその他多くの經論とも参照して広くて深味のある阿彌陀經解釈になっている。なお、本書成立の因由にちなみ冒頭に本願寺能化職にあった八人の学匠の略伝を記す小論が収められている。

⑦〔参考〕『浄土三部經概説(改訂増補版)』坪井俊映著(隆文館、昭和四〇年)巻末「浄土三部經研究文献目録」及び『浄土三部經下「中村・早島紀野訳註(岩波文庫、昭和三年)巻末「阿彌陀經の文獻」参照 ⑧谷大・東大・東洋大・花園大・立正大・竜大 ⑨京都・永田文昌堂 (森章司)

阿彌陀經成立史論 ①A-mi-da-kyō-sei-tsu-shi-ron. ②一冊、新書判、本文六六頁、注釋三九頁・附錄考証三四頁 ③存 ④楠基道(1881-)著 ⑤昭和三一(1956)初版

⑥本書は阿彌陀經がいつの時代に如何なる地点において、どのような文化の環境の下、出現・成立し、如何なる過程を辿って、東西に流伝したかを探究せんとするものである

の第一に、最初本經は何經と呼称されていたか。第二に、漢訳の原本は何であったか。そしていつ頃漢訳されたか。第三に、その漢訳文には、字句の異同はないか。もしあれば、その主要な異同に就いて、原本及び西蔵訳本の兩者と対照して、如何なる相違があるか。第四に、漢訳には異訳本はないか等を検討し、本經説述の内容に穿入して、そこに読解される主要思想を採り上げ、他の經典とその説述変異の示す過程を比較し、阿彌陀經の信仰上に於ける優位の確立を立証せんがため、本經が仏教伝播史上、如何なる役割を果しているかを成立史を通して、探究してある。尚、經錄考証も終りに附してある。(小林昭英)

⑨京大・東洋大・仏大・竜大 ⑩京都・永田文昌堂

阿彌陀經丁亥錄 ①A-mi-da-kyō-tei-gai-roku. ②五卷一冊、A5判、三六三頁 ③存、新編真宗大系第四卷 ④易行院法海(1768-1834)著、稻葉圓成(1881-1950)他編 ⑤昭和二七(1952)

⑥本書は、文政年間の夏安居聞書で、凡そ五十六会より成っている。阿彌陀經の講義でこの録ほどに懇切詳細なものはあるまいといわれるほどである。内容は、初めに、七門を分かって、此の經の主義を探り、その後、經文に即して、解釈がほどこされる。当時の宗乘・余乗の學問を駆使し、本經の所頭を解明しているものである。(本多弘之)

⑨谷大 ⑩東京・眞宗典籍刊行會

佛說 阿彌陀經並解題 → 佛說阿彌陀經並解題